

## 【血液検査研究班】

# 日当直時の血液検査

伊勢崎佐波医師会病院 臨床検査科  
堀内 伸一

血液学的検査は初診時の患者様の状態を把握するのに生化学検査と並んで必要不可欠であり、且つ血液疾患などの診断に直結する場合も多い。しかしながら検体状態や機器の測定限界に起因した測定上のトラブルも発生しやすい。それにも関わらず、日当直時の血液検査では、血液検査担当者以外の技師による検査となることが多い。血液担当技師であれば塗抹標本などの情報も参考とすることができるが、担当外の技師にとってはそこまで行うことは難しい。その為、自動血球分析装置の異常を示すメッセージを正しく読み取り適切に対処しなければならない。

今回のテーマ「日当直時の血液検査」ということで、血液検査担当者以外の方を対象として、トラブルの対処法や検査結果の解釈などを解説いたします。

機器トラブルというと、検出器ツマリ、圧異常、そしてトラブルではないが雷、私も技師に成り立ての頃は、雷による停電に神経を遣ったのを記憶しています。

検査結果の見方としては、機器が表示した結果で本当に正しいのか？（血小板凝集、寒冷凝集など）

血液検査の初任者講演で一番リクエストされる凝固検査にも触れたいと思います。担当技師なら何ということもない検査ですが、当直者にとっては、交差適合試験と並んで負担になっているのが現状です。以前、当直者からこんな申し送りがありました。「凝固検査が出て、その結果が正常なのか異常なのか?分からないが、一応報告しました」と。担当外技師なら当然有り得る事なので、この場をかりて正常値から結果の解釈まで解説したいと思います。